

共中央にとつて。かれらにはコミンテルンの権威はなお偉大であり、王明・博古らの指導部は、コミンテルン代表ミフの背景なしに成立し得なかつた筈である。

第八章は、中共指導者の変遷を第三―第六章にみた政治的問題で説明しうるか否かについて考えている。著者の説明から判断すると、陳独秀と瞿秋白の場合には政策の変更による交代が明確であり、向忠発、李立三、王明・博古の場合は政策問題よりそのほかの要素が多いようである。ここでも著者は先述した洛甫を単独に扱っている。著者の意見をまとめると次のようである。一九三四年一月の五中全会には博古、毛沢東、洛甫の三派が対立して、これ以後誰が指導権をとつたか明らかでない。ただ、この頃から博古は勢力を失い始め、洛甫が党書記になつたので、彼がソビエト政府主席の毛沢東と組めば、それは漸進的革命的論の地位の一步前進を意味しよう。多くの点からみて、おそらく博古・洛甫の指導部だつたのであろう。一九三四年七月一五日の宣言は、紅軍政治委員の周恩来が毛沢東と手を組んだことにより可能だつたのであるが、これらの説明は資料的典拠なしに行われているので説得力に弱いきらいがある。

こうして結論として著者は、この時期の中共が社会革命と民族革命を総合しなかつたこと、社会革命を強調しすぎて逆

にソビエトの根底を危くしたこと、一九三四年の敗北によって初めて中共はそれ迄の誤りを訂正することになつたが、この敗北は軍事的なものでなく政治的なものであつた、とまとめている。第五次围剿期の紅軍の軍事路線については、公認の中共党史も誤りを指摘しているが、その軍事路線が第三次極左路線の敗北を決定的なものにした直接の原因であることと考えれば、著者の説く毛沢東戦略の勝利と関連づけて、軍事路線にも少し詳しく触れてもよかつたのではないかと。

最後に、本書の構成について一言述べておきたい。すでに説明したように、本書は問題別に毛沢東戦略の展開を分析していて、この方法は各々の問題についてみる場合には便利であるが、全体を通して読む際には重複した記述が多く煩しく感じる部分も出てくる。これはまた、時代を追つて全体を把握するには不便であると云い換えてもよ。

(Shanhi Swarup; A Study of the Chinese communist movement. Oxford, Clarendon Press, 1966)

サー・ハロルド・ベイリー著

サ力語文書研究二種

辻 直四郎

一、サ力文書。Saka Documents, portfolios I-IV, 96

plates (1960—1967) を刊行した著者は、これを随伴する Text volume を出版し、Khotan 及び Tumshuq Saka の文書をローマ字に転写し、英語で翻訳し、短く注解を添え、研究者に待望の便宜を提供した。内容は僅少の例外（例えば下記二、法華経要旨参照）を除き公文書である。言語はいわゆる後期コータン語に属し、その正確度には種々の段階が認められる。公文書の性質として地名・人名・官職名（中国語由来のもの等を含む）・物品名に富み、解釈にも、文学・宗教的文獻の場合とは異なる多くの困難が伴う。今サカ語学の最高権威者の手により転写・翻訳されて、これら難解の文書が一般の研究者でも近ごろ見出し易くなったことを心から喜ぶ。巻末の Select index to the commentary (p. 125—9) はサカ語の学習者に検索の便利を与える。

(Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II Inscriptions of the Seleucid and Parthian period of Eastern Iran and Central Asia. Vol. V. Saka. Saka Documents, Text volume by H. W. Bailey. VIII, 129 pp., 1 facsimile, London (Percy Lund, Humphries and Co.), 1968.)

11 『英華経教誨』 コータン語とサカ語の英華経教誨を Pelliot MS 2782, 1—61 = Khot. Texts III (1956), p. 58—61 と今まれ、わざわざ六十一行からなる短篇であるが、その最初の

九行は他の写本 British Museum MS Oriental 8212, 162, 82—91 = KT II (1954), p. 5—6; Saka Doc., Text vol. (v. supra), p. 23 (text), p. 27 (transl.) とも見いだされ、しかも語句・綴字に差異を示す。著者はコータン語の学習者に良い入門書を贈る意図のもとに、全文を翻訳し (p. 1—4)、内容の主要点を挙げ (p. 5—6)、梵文法華経との対応 (p. 7) を示したのも、本書の主要部「注釈」(p. 8—43) に移る。まず後期コータン語の文字・綴字・文法の特徴に触れ (p. 8—10)、本篇に用いられた代名詞・数詞・不変化辞を列挙し (p. 10—14)、ついで一語一語の語形・意味・語原について懇切に説明しつつ (p. 14—43)、注釈中に扱われたイラン語 (p. 44—46) ならびにサンスクリット語からの借用語 (p. 47—52) を表示し、最後にロータン語本文のローマ字転写を再録し、前述の Brit. Mus. 写本 lines 82—91 の訳文を添えて (p. 53—57) 、「これにより著者の目的は十分に達成され、コータン語の実習に絶好な参考書が与えられた。しかし注釈の真中には詳細な解説が少なからず、コータン語の研究者一般にも多く貴重な資料を提示している」。

(Sad-dharma-pundarika-sūtra. The Summary in Khotan Saka. By H. W. Bailey. The Australian National University, Faculty of Asian Studies. Occasional paper 10. 57 pp., Canberra 1971.)